

## 高尾学区連合町内会と介護福祉学生・教員による 認知症高齢者の所在不明者搜索訓練実施報告と一考察 － 認知症高齢者等にやさしい地域づくりの視点から －

松本百合美\*・岡 京子・大竹 晴佳

新見公立短期大学地域福祉学科

(2016年11月30日受理)

2016年3月に新見市高尾地区と介護福祉学生・教員が実施した認知症高齢者の所在不明搜索訓練を報告し、認知症高齢者等にやさしい地域づくりに対する訓練の意義を考察する。地域包括ケアが推進されている現在、地域はその機能の1つとして認知症の人を含めた地域介護力を求められているといえる。すでに高い地域力を有する高尾地域において、認知症の啓発や認知症予防等から、認知症ケアにより近い認知症高齢者の所在不明者搜索という取り組みは、新たな課題としての認知症ケアへの関心を高め、訓練継続と『バージョンアップした訓練』実施という意識を向上させる結果となった。地域介護力向上という新たな地域課題は、高尾地区で形成されている重層的な組織、個々の組織活動を柔軟に運用できる包括的な地域づくりへの志向、形骸化した活動よりも現実的な課題への対応という視点が、認知症高齢者等にやさしい地域づくりにつながっていたことが考察できた。

(キーワード) 認知症高齢者の所在不明者搜索訓練, 認知症高齢者等にやさしい地域づくり, 地域介護力

### はじめに

認知症高齢者の行方不明問題は、2013年から特集を組んだNHKの放送や報道をきっかけに、多くの国民の関心事となっている。それまでその実数さえ把握されてこなかった認知症高齢者の行方不明者数は、警察庁の発表で、2013年10,322人、2014年10,783人、2015年12,208人と3年連続で1万人を超え、年々増加傾向にあることが明らかになっている。こうした状況の中、2015年1月厚生労働省は、全国で認知症を患う人の数が平成37年には700万人を超えるという推計値を発表、2013年から進めていた認知症施策推進5カ年計画(オレンジプラン)に代わるものとして、認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)<sup>注1)</sup>を策定した。その柱の一つとして「認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進」を掲げ、「認知症高齢者等にやさしい地域づくりを通じ地域を再生するという視点も重要」と謳っている。こうした背景の中、福岡県大牟田市で2004年から始まっていた「徘徊SOSネットワーク模擬訓練」は、全国に波及し、現在多くの自治体等で、認知症の人への声かけ訓練や行方不明者の搜索訓練が実施されている。

そこで本稿では、岡山県新見市の高尾学区連合町内会と新見公立短期大学が合同で行った、認知症高齢者の所在不明者搜索訓練について報告し、『認知症高齢者等にやさし

い地域づくり』の視点から、本活動の意義や今後の課題を検討する。

岡山県新見市は、県北西部に位置し、鳥取県、島根県、広島県と県境を接する中山間地域である。平成27年10月の人口は30,912人、高齢化率38.4%である。平成26年10月に実施された高齢者ニーズ調査によると、回答のあった市内に住む高齢者の15%が認知機能障害を有し、境界型を含めると29%に上ることが報告<sup>1)</sup>されている。現在、新見市等が行っている認知症高齢者等が利用できる支援事業としては、平成20年から全国に先駆けて行われた高速通信網の整備を活用した緊急通報事業、平成25年から認知症初期集中支援チームの設置、独居高齢者宅等戸別訪問支援事業、認知症老人徘徊感知器の貸与(介護保険サービス)などがある。また、2015年7月からは、地域の高齢者や子ども、障がい者に対して、郵便局や銀行などの企業が、従来業務の中で高齢者等の異変に気付いた場合に新見市包括支援センターへ連絡するという「高齢者等事業者見守りネットワーク事業(通称 にいみ見守りネット事業)」を開始したところである。認知症による所在不明者搜索訓練や地域での声かけ訓練については今のところ実施されていない。

\*連絡先: 松本百合美 新見公立短期大学地域福祉学科 718-8585 新見市西方1263-2

## 1. 訓練実施の目的と活動地域

岡山県新見市高尾地区は、高尾小学校と思誠小学校の2つの学区にまたがる。今回、搜索訓練を実施した高尾学区は、国道180号線と中国自動車道が結節し、道路開通に前後して宅地化された地域と、山裾を縫うように通る旧道沿いの地域からなる。中山間地域ならではの昔ながらの地域の繋がりが残っている地域であり、高尾学区連合町内会は、この地域の24町内会、341戸が入会<sup>※2)</sup>する共同体の中心的役割を果たしている。連合町内会の他、長寿クラブや防犯組合連合会、高尾小PTA、若連中などの組織があり、1991年にはこれら各種団体からなる高尾学区各種団体連絡協議会が発足している。また、2013年には連合町内会自主防災部をつくりその活動も始めている。地区の公民館である高尾ふれあいセンターを活動拠点に、地域住民の趣味や生涯学習のサークルなどの住民の自主的活動、独居高齢者宅への給食サービスなど住民相互の支えあい活動、連合町内会が主催する地域ぐるみの行事や文化祭の開催、連合町内会や各種団体連絡協議会などの組織化した体制を備え、重層的な活動が行われている地域である。一方、旧道沿いに住居を構える旧来の住民と後に宅地化された地域に転入してきた住民との交流、日中留守家庭への回覧板等情報連絡の難しさ、地域の相談役となっている民生委員や地域の世話役の人々の世代交代などの課題も抱えているという。

新オレンジプランでいう「認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくり」や、地域包括ケアシステムにおける「重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができる」地域づくりとは、認知症や要介護状態にある人も地域で支えられる地域づくりということである。介護保険制度は「介護の社会化」を実現したが、現在構築を目指す地域包括ケアシステムでは、介護保険制度の財政的逼迫に伴う利用抑制が同時に行われている。また、2015年から介護保険制度における特別養護老人ホーム等の入所施設の利用要件が要介護度3以上に引き上げられた。地域で重度要介護者やその家族を支える『地域介護力』の向上が今後新たな地域課題となっていくと考えられる。そこで、すでにその基盤となる地域活動を積極的に実践している高尾地域において、地域介護力向上の視点から、介護福祉を学ぶ学生や教員と共に、認知症高齢者の所在不明者搜索訓練を実施することは、新たな地域課題である地域介護力を備えたケアにつよい地域づくりへの第一歩となるのではないかと考えた。こうした観点から、本稿では第1回の訓練実施を振り返り、ケアにつよい地域形成へむけてその可能性と課題を明らかにしたい。

## 2. 高尾地区と新見公立短期大学地域福祉学科とのつながり

新見公立短期大学地域福祉学科は介護福祉士を養成する短期大学である。1996年の学科開設以来、『地域福祉』という名が示す通り、「地域社会における介護福祉の展開ができる」人材養成を目指してきた。新見地域の伝統文化である備中神楽を、地域住民を大学の非常勤講師に迎えて指導を受ける授業を設け、新見市の伝統行事である『にいみ土下座祭り』への参加、新見市高瀬地区での蕎麦づくり、本報告の活動地域である高尾地区との交流などを通して、介護対象者となる人々の生活基盤である地域や生活文化を学び、『生活者としての対象者理解』の視点を学ばせている。介護福祉を学ぶ学生が地域活動を行うことで、地域の人々が「介護福祉」や「介護福祉と地域」への関心が高まることも願っている。

高尾地区と本学地域福祉学科とのつながりは、2012年から始まった学生と高尾学区住民有志とで結成した「高尾学区・新見公立短期大学学生との交流を考える会」通称、高尾交流会から始まる。この地区の出身者が本学在学時代に「地域に貢献できる学生の自主的活動」として、地域の人々が参加できる『学生自主企画講演会』を立ち上げた。その初代実行委員長であった卒業生が、高尾地区でも地域活動をしたというのがきっかけである。1年間に6回、地域のメンバーと学生が交流し、はじめの2回は、地域住民が主催となって、竹から削り出す竹トンボや昔ながらの水鉄砲作り、桜餅や柏餅作りを教えてもらっている。残り4回は学生が4グループに分かれて、学生の企画による活動や、高尾地区公民館で行われる文化祭の手伝い、地域行事であるとんど祭りの手伝いを行ってきた。交流会を通して学生は、交流活動そのものを楽しみ、高齢者の生活の技を学ぶ。同時に、地域の人々の語りから、地域のつながりの深さや誇り、地域で行われている行事や文化祭が緩やかな地域住民相互の見守りや支えあいの場となっていることに気づくこともある。

一方、この活動の介護福祉士養成教育としての目標は、発足時の卒業生の「学生が地域に貢献できる資源となる」という思いを引き継ぐとともに、本学科が目指す「地域における介護福祉が展開できる力」を養うことである。地域包括ケアシステムにおいては、介護福祉施設等における介護福祉の展開だけでなく、「住まい」を中心とした地域そのものに介護福祉の視点から働きかける力が重要であり、介護福祉士として地域介護力へ寄与する視点を養う学びの場としての位置づけである。

## 3. 認知症高齢者の所在不明者搜索訓練に至る経緯

地域包括ケアシステムにおいては、高齢者だけでなく、障がい者支援においても地域を志向しており、子育てやこ

どもの見守りにおいても、地域に期待されることは大きい。つまり、高齢者の健康の維持や介護予防から重度要介護者、障がい者、子どもや子育てなども含めて、介護や福祉的支援が、地域の日常生活の中で行われ、受け取る側も介護や福祉サービスの「利用者」としてでなく地域住民として受け取ることができる。また、受け取る人々が次世代の地域介護力を高めることに貢献しているといった暮らし方が、地域の生活文化として形成されることが、地域包括ケアシステムを実現するための地域像のヒントであり、認知症になっても暮らしやすいまちづくりといえるのではないかと考えて来た。こうした思索のもとに、学生と取り組んだSNSを活用した所在不明者の搜索実験と意識調査<sup>注3)</sup>、認知症による行方不明を防止するための声かけ劇<sup>注4)</sup>などを行ってきた。また、大牟田市など他地域で実施されている訓練に参加し、先進地の活動を研修してきた。大牟田市の訓練は、現在市内だけでなく隣接する自治体も合同して実施するなど、大規模・広域での活動となっているが、その活動のもとには、老人クラブ創設期における住民相互の支えあいに対する気概と、先人たちが築き上げた地域への愛着と誇りであった<sup>注5)</sup>、<sup>3)</sup>ことを学んだ。日ごろから交流活動で縁のある高尾学区地域は、地域住民の繋がりが強く、地域力を持った地域であること、大牟田市における老人クラブの創設の経緯が、高尾地区の長寿クラブの活動に共通するものが多いこと、交流を通して介護福祉への理解もしていただいていることなどから、高尾地区でなら実施できるのではないかと考えた。また、本活動実現に向けて、高尾連合町内会役員の中に、高齢者介護福祉施設の運営に携わり、地域づくり活動にも取り組んできた方がおられ、その方との出会いという幸運が実施に至る原動力となった。

高尾学区連合町内会では、2013年から自主防災組織を創設し、活動を始めたところであった。2015年には2回の自主防災活動を計画しており、1回目の防災訓練を終えて、2回目の訓練について協議しているところであった。自主防災組織は、地域住民の火災の防止や消火訓練、避難訓練などを行うものであるが、近年頻発する大規模自然災害においては、地域住民の相互支援による避難や避難生活に必要な活動、近隣地域の災害弱者の把握や安否確認の役割が発揮された事例が報告されている。高尾学区連合町内会自主防災部においても、相次ぐ地震や豪雨災害を受け、地域での情報収集や伝達、住民の避難誘導などを地域ぐるみで行えるよう連絡網の整備や訓練を検討しているところであった。認知症の人の所在不明は早期発見ができなければ命にかかわる問題であること、搜索訓練を実施するにあたり、連絡網の整備や地域の危険箇所や見通しの悪い場所のマップを作成すれば、自主防災で活用できるのではないかと、高尾学区連合町内会自主防災部の活動として提案するに至った。

#### 4. 搜索訓練までの準備

2015年10月初旬、学生及び教員が連合町内会役員、民生委員、各地区の福祉委員らが集まった会合に参加し、民生委員の活動の現状等を聞いた。この会合で自主防災活動の一環として、認知症高齢者の所在不明搜索訓練を提案したが、消火訓練や避難訓練のイメージが強い自主防災活動という観点からは合意が得られず、より具体的な説明を求められた。

第2回の連合町内会幹部会の会合では、具体的な訓練方法、タイムスケジュール、準備等をこちらから説明を行うかたちとなった。準備として、自主防災との関連でも不可欠と思われた連絡網の整備については、自宅の固定電話番号では搜索活動では役に立たないため、携帯電話での連絡網の作成を目指したが、出席者からは抵抗感が示された。連合町内会全体の携帯電話での連絡網が作成できないことから、連合町内会全域での搜索訓練には困難をきたす可能性が見えたため、初回の訓練としては、対象者を発見する体験を重視し、連合町内会を3ブロックに分けて、それぞれのブロックで搜索すること、搜索対象者情報共有は、全員が実施日当日、公民館に集合してその場で行うことが決まった。各ブロックの搜索方法、連絡方法はブロック内で検討してもらい、その地域の実態に合わせた方法を決めてもらうことにした。説明・検討のため作成した資料は図-1に示す。

今回、搜索参加者は連合町内会役員と各町の総代、福祉委員など1ブロック6~7名で構成された。地域の各戸住民に対しては、参加を呼びかける案も出されたものの、まずは役員での搜索訓練を行うという決定がなされ、各戸に対しては訓練実施の周知とお願い、自発的な情報提供の依頼を記した回覧板(図-1 左上)を回すことになった。また、連合町内会会長から、新見警察署、新見消防署へ実施の挨拶をしてもらった。

#### 5. 搜索訓練の概要

平成28年3月13日に訓練を実施した。当日は、実際に地域住民が認知症高齢者役の学生を搜索する訓練、SNS(LINE)を活用した搜索訓練、携帯端末のGPS機能を使用した位置確認の検証という、2つの訓練と1つの検証実験を行った。LINEでの搜索訓練およびGPSの位置確認の詳細は別途報告することにするが、その概要は以下のとおりである。

LINEでの搜索訓練では、実際の搜索には参加しない『高尾若連中』の会員(43歳までの高尾地区に居住する人、会員約40名)に協力をしてもらった。高尾若連中の会員は、子育てや仕事に忙しい世代の人たちである。自分の親世代はまだ元気高齢者であり、認知症等介護問題を身近にとらえ

**高尾学区連合町内会自治生防動員  
を新見小学校短期大学地域福祉学科  
認知症所在不明者検索訓練を行います！**

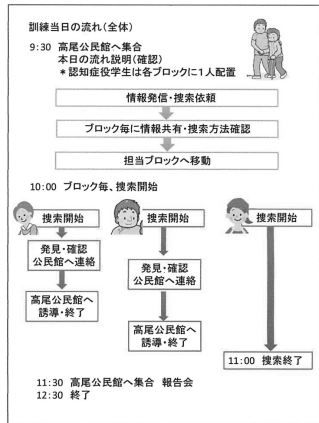
各地で、高齢者の行方不明者が多くなっています。行方不明者を発見するために、地域での見守りや早急の情報共有・捜索が重要です。高尾学区の一環として、所在不明者検索訓練を実施します。当日は、学生や捜索員(当日参加者)が地区内を歩きます。ご迷惑にならないようご注意ください。ご了承ください。ご迷惑にならないようご注意ください。

**日時: 3月13日(日) 10:00~11:00**  
\*上記時間内に捜索訓練をします

**訓練範囲: 高尾小学校区**

- 当日は、学生が認知症役になって歩きます。
- 捜索員が、「見かけなかったか? などお尋ねすることもあります。その際はご協力をお願いします。
- 皆様にご迷惑をお願ひするものではありません。

**お問合せ**  
事前: 運営委員長(連合町内会会長)  
当日: 高尾公民館



と地域内を移動する複数の端末の位置確認がどの程度できるかを検証することを目的とした。3台の端末の位置情報を本部である公民館の端末で確認したが、ほぼタイムラグもなく、かなり正確な位置把握ができることが検証できた。

## 6. 地域住民が認知症高齢者役の学生を捜索する訓練

### 1) 訓練の内容

実際に地域住民が認知症高齢者役の学生を捜索する訓練は、3つのブロック毎に、連合町内会役員や各町の総代、福祉委員など6~7名の捜索チームで、各ブロックを歩いていく認知症高齢者役の学生を、「発見し、声をかけて公民館へ誘導する」ことを目標とした。認知症高齢者役の学生の情報の共有、捜索方法、捜索チーム間および本部との連絡、声かけ、公民館への誘導等が訓練内容である。

### 2) 組織(訓練実施体制)

本部を高尾公民館に置き、運営委員長1名(高尾学区連合町内会会長)、運営副委員長3名(連合町内会副会長、各ブロックを担当)、本部長1名(自主防災部長)、副本部長2名(自主防災副部長)、事務局1名(町内会総務部長)とした。各ブロックの捜索メンバーは、代表者を町内会総務副部長、女性部長、事業部長が担い、地区の総代や福祉委員等から構成される1ブロック6名のチームが結成された。これに、学生11名、教員3名が加わった。

### 3) 実施と進行

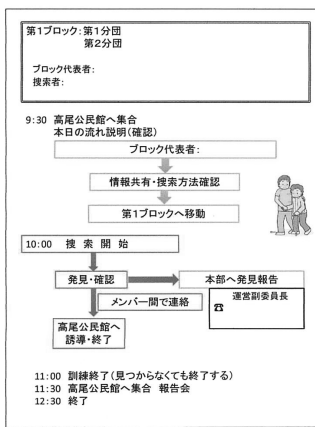
実施日及び実施時間は2017年3月13日(日) 9:30~12:30である。

9:30に公民館に集合した本部のメンバーと捜索チームメンバーは、本日の目標である「発見し声をかけて、公民館へ誘導する」ことを確認した。

3ブロックに分かれて、それぞれの対象者(認知症高齢者役の学生)の情報を書き込んだ情報シートをブロックの代表者に渡した。ブロック代表者はチームメンバーに情報を伝達し、捜索地域へ移動した。情報シートは、事前に捜索対象者の氏名、年齢、性別、不明直前にいた場所、服装、履物、持ち物、体格や髪型の他、認知症の有無と程度、徘徊歴の有無、その他の情報として、「沖縄に行きたいと言っていた」や「実家が沖縄」などを記載した用紙を作成しておいた。

認知症高齢者役の学生は、記録係の学生と2人一組になり、各ブロックでそれぞれが決めた出発地点で待機させた。移動(徘徊)ルートは、学生が事前にブロックごとに地図を見ながら実際に地域を歩いて、40分程度歩けるルートを決めていた。

高齢者役の学生には、①故意に逃げたり隠れたりするこ



高尾小学校区連合町内会 捜索情報シート

所在不明者情報シート

【発見先】町内会・分団代表  
年月日時分 →【受信】年月日時分

【所在不明者情報】

氏名 \_\_\_\_\_ 年齢 \_\_\_\_\_ 性別 \_\_\_\_\_

住所 \_\_\_\_\_

所在不明発見時間 \_\_\_\_\_ 月 日 時 分

不明直前にいた場所 \_\_\_\_\_

服装 上 \_\_\_\_\_ 下 \_\_\_\_\_

履物 \_\_\_\_\_

持ち物 \_\_\_\_\_

その他 \_\_\_\_\_

身体的特徴

身長 \_\_\_\_\_ 体重 \_\_\_\_\_

体相 \_\_\_\_\_

髪型 \_\_\_\_\_

その他 \_\_\_\_\_

認知症の有無: 有(程度・中度・重症) ・ 無

徘徊歴の有無: 有(記録された場所 \_\_\_\_\_ 方面) ・ 無

その他(本人のよく通った場所や家など) \_\_\_\_\_

図-1 説明会用資料

回覧板(左上) 訓練イメージ図(右上)

ブロック内の流れとメンバー(左下)

所在不明者情報シート(右下)

ることは少ない世代といえる。また、地域活動においては、まだ親世代が参加することが多く、家庭内での地域活動の世代交代を今後迎える世代である。また、多くはSNS等を日常的に活用している世代でもある。地域住民による捜索訓練とは別に、捜索対象者役の学生を作り、高尾学区内全体を捜索域とした。捜索は学生チームが行い、捜索対象者の情報と捜索依頼を一齐にLINEで流し、周囲を見てもらって、情報を提供してもらうことを依頼した。その情報を参考に、学生チームが捜索を行った。また、捜索の学生チームは、LINEで自分の位置や捜索の状況を確認したり、他の学生や本部にいる教員のアドバイスを受けるための相互の連絡にも活用した。

GPSを使用した位置確認の検証については、学生の捜索チームのメンバー及び捜索対象者である高齢者役に端末を持たせ、前述のLINEによる捜索訓練を行いつつ、本部に設置したスクリーンで、それぞれの位置を確認するというものである。新見市は、早くから携帯電話不感地域の解消を目指した情報基盤整備を行っており、本部である公民館

とはしない、②途中どこかでじっとしていてもよい、③「学生さんですか」「認知症役の人ですか」という問いかけには応じない、④「公民館へ行きましょう」という言葉かけには、自分の思うまま対応してもよいという4点と、歩行上の注意を行った。

10:00から捜索を開始し、同時に待機していた高齢者役学生も移動を始めた。捜索は1時間とし、開始から発見、誘導して公民館まで帰ることにして、11:00には発見できていなくても公民館へ帰るということにした。公民館へ到着後は、ブロックごとに意見交換をし、11:30から報告・反省会をして、12:30には終了することとした。

#### 4) 捜索結果

当日の訓練終了後、ブロックごとに結果と気づきをまとめ、報告会を行った。その結果をまとめたものが表1である。3ブロックとも、訓練開始から15分～41分の間に発見ができた。捜索方法は、すべて徒歩であり、事前にブロック内を2～3地域に分け、2人以上で捜索に当たっていた。捜索チーム間の連絡は、携帯電話を使用し、メンバー同士の連絡はスムーズに行えていた。本部への発見連絡を忘れていたブロックもあったが、すべてのブロックで捜索・発見・誘導を想定時間内で終了できていた。

#### 5) 報告・反省会での意見

報告会では、どのブロックからも、捜索中に地域の人に見かけなかったか尋ねたくても、地域内に出歩いている人がおらず、情報を得ることができなかったことをあげていた。

情報共有については、まず服装に関して、2つのブロックから、聞いていた服装と実際に学生が着用していた服が違うという意見が出された。一つは「黒色」のトレーナーが紺色や深い紫色にも見えるというもので、光の加減や個人が認識する色味の違いが影響することが分かった。もう一つは、「黒の長袖、グレーのジャージ」という情報と実際に着ていた服が違ったというものだった。しかし、学生は黒の長袖のジャンパーを着て前ファスナーをきちんと締め、グレーのジャージのズボンをはいていた。後日、映像（地元のテレビ局の取材映像）を確認したところ、情報シート（図-1 右下）には、『服装：上 黒の長そで 下 グレーのジャージ』と記載していたものを、捜索チーム内での情報共有の際、「黒の長袖にグレーのジャージ」と口頭での伝達が行われ、この時、グレーのジャージはズボンではなく、『黒い服の上にグレーのジャージの上着を重ねて着ている』と認識された可能性が高いことが推測できた。情報をやり取りする時には、そうした齟齬が生じることが

表1 捜索結果

|                        | Aブロック   | Bブロック   | Cブロック  |
|------------------------|---|---|--|
| <b>発見時間</b>            | 10:41   | 10:15   | 10:32  |
| <b>場所</b>              | A地点   | B地点   | C地点  |
| <b>本部への発見報告</b>        | (本部から) 10:48  | 10:20   | 10:35  |
| <b>メンバー間での発見報告終了時間</b> | 10:43   | 10:18   | 10:35  |
| <b>誘導・到着時間</b>         | 10:54   | 10:25   | 10:45  |
| <b>捜索方法</b>            |   |   |  |
| ①移動方法                  | 徒歩  | 徒歩  | 徒歩   |
| ②捜索方法                  | 二組に分かれて捜索   | ブロック内を3地域に分けて、2人1組で捜索                               | ブロック内を3地域に分けて、2人1組で捜索。捜索者の自宅のあるエリアを中心に捜索                                     |
| ③相互連絡                  | 携帯電話  | 携帯電話  | 携帯電話   |
| <b>よかったこと</b>          | 認知症の捜索訓練をしてよかった。  | 対象者の靴が「白いスニーカー」の情報が有り、白色が遠くからでも目立った。                | ・捜索者の自宅のエリアを中心にしたので地域に詳しく、認知症の人が居そうな場所がわかりやすい。<br>・ブロックを3つに分けて捜索できるだけの人数がいた。 |
| <b>難しかったこと</b>         |   |   |  |
| ①発見まで                  | 尋ねられる人がいなくて、情報が得にくい。対象者が移動する後ろを捜索していたようで、見つかりにくかった。民家の垣根が | 地域内に出歩いている人がいないので、尋ねることができなかった。歩くのが早くて、追いつくのが大変だった。 | 地域内に出歩いている人がいないので、尋ねられる人がいなくて、情報が得にくい。                                       |

|                 |                                     |  |  |
|-----------------|-------------------------------------|--|--|
| <b>②発見時</b>     | 有り、発見しにくい。『沖繩に行きたい』と言った(ので、確認できた)。  | 名前を聞いたら「わからない」と言われ、「どこに行くの」と聞いたので、その他の情報『沖繩へ行く』で確認できた。 | どう声かけしようか、本人確認をしようか迷った。本人は名前がわからず、出身地『沖繩』の情報が決めた手になった。得ていた情報「黒の長袖」と実際の色が違って、不安だった。 |
| <b>③公民館への誘導</b> | みんなで公民館へ                            | 素直に「はい」と応じた。   | 話をしながら誘導したが、どんな話題にしようか困った。誘導途中に、「空港へ行く」と言ったので、どう対応したらいいか困った。                       |
| <b>④その他</b>     | 対象者の服装の情報が「黒の長袖、グレーのジャージ」がわかりにくかった。 |  | ・認知症の人への先入観があって、言葉かけに戸惑った。<br>・「黒い長袖」を季節柄、防寒着だと先入観を持っていて、認知症の人の行動の理解が難しい。          |

分かった。逆に、白いスニーカーを履いていた認知症役学生を捜したチームからは、白い履物は遠くからでもよく見えたという感想があった。

次に、身体的特徴には、身長、体重、体格を書いていたが、服装によって体格はよくわからないこと、身長や体重は、その数値がどの程度なのか普通に見ただけではあまり参考にならないという意見があった。

最後に、発見後本人であることを確認するために役に立ったのが、その他の欄に記載していた「沖縄に行きたいと言っていた」という情報である。声をかけて、話をするうちに、「沖縄」という言葉が高齢者役学生から出たので確信できたという感想が、どのブロックからも聞かれた。

## 6) 連合町内会幹部会での総括

平成28年3月30日、高尾学区連合町内会幹部会において、上記の概要と学生からの反省や意見をまとめ、報告した。幹部会出席者（すべて訓練参加者）からの意見は以下のとおりであり、実施したことで、現実味が増し、さらなるバージョンアップや訓練の継続の意思が出された。

- ・TVでの放送を見た他地区の人から良い取組みだと言ってもらえ、反響は大きかった。
- しかし、自分がこの訓練について十分に説明ができなかったことから、じっくり事前の準備や認知症に対する勉強をしておく必要があると感じた。
- ・今回は認知症役が素直に声かけに応じてくれたが、実際にはかなり難しいと思う。
- いろいろなパターンの人もあるので、これが答えというものではなくても、いろいろなパターンで声かけの訓練を試みてはどうか。
- ・今回は、小さいブロックで行ったが、もっと広い範囲での捜索となるとかなり難しいだろう。今度は、もっと広域でやってみるのもよいのではないか。
- ・捜索対象者の情報に関しては、実際のところ写真が有効である。歩き方の特徴を伝えるのも有効である。
- ・次年度も引き続き、バージョンアップしながら訓練をしていきたい。
- ・スマートフォンやGPSの端末もあるということについて、どんなものがあるのか。どうやって使うのか興味がある。

## 7. 考察

### 1) 訓練実施の効果

今回、初めての捜索訓練であったにもかかわらず、多くの参加者を得られた。高尾学区連合町内会というしっかりとした組織と、役員、委員、総代などの重層的な体制、参加者一人一人の役割意識の高さがうかがえた。

初回の会合では、連合町内会の意思として訓練実施を決

定するに至らず、訓練の具体的な説明を求められたため、2回目の会合ではこちらが提示した訓練の概要を一方向的に説明するというかたちになった。しかし、具体案を説明する中でも、参加者からの反対意見や別の提案が出され、それらをもとに計画の修正やさらなる協議ができた。また、ブロック毎に捜索方法や捜索チーム間での連絡方法をチーム内で検討をしてもらえたことが、参加者の自主性を醸成し、短期間での実施と、「1時間で発見、誘導をする」目標を達成できた要因であると考えられる。また、3つのブロックに分けて発見するという成功体験は、最終の幹部会での総括にあるように、認知症に関する学習機会の必要性、訓練の継続、捜索地域の拡大や声のかけ方訓練の必要性など「バージョンアップした訓練」を目指す前向きな意見につながったものと考えられる。

2点目は、実際の情報伝達、捜索、声かけ、誘導を行うことで、前述した服の色や情報伝達中に起こる齟齬などの困難さや、本人を確認するのに役立った靴や最近の言動など、体験を通して参加者相互に学びを得られたことも効果としてあげられる。

また、新見市内で初めての認知症高齢者の所在不明者捜索訓練であったことから、地元のテレビ局や新聞社などからの取材、報道が行われた。総括にも挙げられていたように、報道を見て他地域の人からも注目を浴びることは、訓練参加の動機づけの強化や新たな地域の誇りにもつながり、広報の重要性に気づかされた。また、こうした活動が他地域にも伝わることで、より広域での訓練実施や地域を考えるきっかけになるなどの波及効果を期待したい。

### 2) 地域全体での関心の醸成

今回、一般地域住民に対しては積極的な参加の依頼はしていないものの、回覧板で実施と情報提供を依頼する文書を回していた。しかし、訓練当日、「道を歩いている人がいなかった」という結果となった。また、高齢者役の学生は、少数であるが屋外で洗車をしている人や農作業をしている地域住民と出会って、会釈を交わしたり、住民に見られたという認識を持ったという記録を残しているものの、捜索者への情報提供には至っていなかった。今後、地域住民の関心を高め多くの地域住民の参加に向けて、広報や実施方法を充実することが必要である。また、高尾地区は旧道沿いに広がる地域であり、商店や会社の事務所、ガソリンスタンドなどがある。学生が移動（徘徊）ルートを決めるために事前に地域を歩いたときは、商用車等の交通もかなりあった。訓練実施当日は日曜日であり、商店や会社は休みで、商用車の行き来もほとんどない状況であったが、地域の商店や仕事をしている事業所との連携ができれば、稼働しているウィークデイには有効な資源となるのではないだろうか。

また、今回並行して行ったLINEを活用した捜索では、高

尾若連中の人に情報提供の協力を得ることができた。訓練当日に時間的な拘束が伴わないこと、LINEを使用してその時いる場所から情報を提供できることなどが、協力承諾のポイントであったようだ。打ち合わせでは、LINEでの若連中内の連絡網作成や、自分が普段つながっている他グループへの協力の呼びかけも行ってもいいのかなど、若者世代ならではの得意分野を生かしたアイデアを出してくれる人に助けられた。こうしたことが契機となって、次世代の地域活動への意識が醸成され、参加のきっかけになる可能性もあろう。

### 3) ケアにつよい地域形成へ向けて

搜索訓練は、ケアにつよい地域づくりに踏み出す第一歩になったのか考察する。総括の参加者からの前向きな姿勢や訓練継続への意思が示されたことは、その可能性が示唆されている。「訓練だからうまくいったけれど、本当の時にはうまく見つけられるだろうか」「正しい答えや模範はなくても、声をどうかけたらいいいのか知りたい」など、現実の問題として難しさに気づくことで、認知症への関心から、認知症ケアに対する具体的な関心に変化しているといえるだろう。今後は、さらに認知症ケアや介護福祉の専門家、行政や警察・消防などがその垣根を越えて、地域とつながることで、地域介護力の実質的な向上に寄与すると考えられる。

最後に今回、高尾学区連合町内会自主防災部の活動として、本訓練が位置づけられたことについて触れたい。介護を必要とするのは高齢者だけでなく、障がい者や子どもも含まれる。若い世代の人もケガをした時には車いすを使用することもあるだろう。各地で頻発する大規模災害において、自力で避難できない多くの人の命が失われた。誰かが車いすで段差を越える介護方法を知っていたら、その誰かが誰かの命を救うことができたかもしれないのである。認知症高齢者支援という課題と、防火・災害時支援といった課題は、従来別々の課題として取り扱われるものであろう。その垣根を越えて「地域住民の命を守る」ことを中心に据えて本活動が実施できたのは、高尾学区連合町内会に包括的な地域づくりと、現実的な課題対応の模索という二つの視点があるからこそ実現できたのではないかと考えている。人口減少時代に突入し、少子高齢化はますます進展していく。地域を担う人々が、多くの課題にそれぞれ対応することは、現実的に困難な時代となる。こうした時代に向かう時、複数の課題を俯瞰して、共通するものを核とした効率的な取り組みや仕掛けが大切になってくるだろう。その核の一つとして、ケアにつよい地域づくりが位置づけられることは意義あることではないだろうか。

## 謝辞

今回の訓練に参加して下さった高尾学区連合町内会の皆さま、訓練実施に向けて支えて下さった連合町内会幹部・自主防災部の皆さま、積極的な理解と学生指導にご協力をいただいた高尾学区新見公立短期大学学生との交流を考える会の皆さま、高尾若連中の皆さま、そして一緒に頑張ってくれた訓練実施をしてくれた学生の皆様に、心より感謝いたします。

注1) 新オレンジプランは、7つの柱をもとに構成。1.認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進 2.認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供 3.若年性認知症施策の強化 4.認知症の人の介護者への支援 5.認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進 6.認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデル等の研究開発及びその成果の普及の推進 7.認知症の人やその家族の視点の重視である。5番目のやさしい地域づくり推進の項目において、徘徊などに対応できる見守りネットワークの構築が含まれている。

注2) 2017年3月、高尾学区連合町内会幹部会資料による町内会数および入会戸数。高尾地区では、24の町内会の地域が高尾小学校の校区と一致している。町民運動会などでは、24町内会を地理的なつながりや戸数により3~6の町内会を1つとして、6分団が形成されている。本訓練においてもこの6分団を利用し、地理的につながっている2つの分団をひとつのブロックとして、3ブロックを形成した。

注3)、注4) 2015、2016年度に地域福祉研究として、学生と一緒に取り組んだものである。

注5) 2015年9月20日実施された大牟田市における第12回認知症SOSネットワーク模擬訓練視察時において、訓練を担当していただいた地区の町内会長様より教えていただいた話であり、後日インターネット検索により、はやめ人情ネットワーク世話人会会員の自主レポートを参考にした。

## 文献

- 1) 新見市介護保険課：共に支え合い笑顔があふれるあたたかい福祉のまち・にいみ 認知症安心ガイドブック 2014年11月
- 2) 新見市：高齢者の心身状態や生活状況等の現状、第6期新見市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画 平成27~29年度。(2016.8.29アクセス)  
[http://www.city.niimi.okayama.jp/docs/2015060900014/files/kourei\\_kaijokeikaku.pdf](http://www.city.niimi.okayama.jp/docs/2015060900014/files/kourei_kaijokeikaku.pdf)
- 3) 小野晃とはやめ南人情ネットワーク世話人会：やさし

松本 百合美

いまちづくりは“向こう三軒両隣大作戦”でいこう！第  
32回北海道自治研修会 地域から作り保健福祉のしく  
み（2016. 09.05アクセス）